

中日本興業株式会社 貴田吉晴社長 インタビュー

総合芸術と言われるエンタテインメントの代表格・映画も激変の波に洗われているが、中部地区では名古屋駅前に「ミッドランドスクエア シネマ」2館を運営するなどの中日本興業（名古屋市中村区名駅4-5-28）が興行界の代表格。4月に社長に就任した貴田吉晴さんに話を伺った。



多彩なイベント、挑戦を重ねることで 映画のプラスアルファと一緒に感動し共有する

—ご就任おめでとうございます。現在の心境は？

貴田吉晴社長 まさか自分が社長に就任するとは思っておりませんでしたので、身の引き締まる思いであります。

これまで多くの方々が築き上げてこられた当社の理念や方針を大切に受け継ぎながら、社員とともに新たな挑戦を重ね、会社の発展につなげていきたいと考えています。就任当初は「自分に務まるだろうか」という不安もありました。そんな折、ある方から「会社を動かしているのは社長一人ではなく、現場で働く社員一人ひとりだ」と助言をいただきました。その言葉に大きく励まされ、私自身の役割について改めて考えるようになりました。

社長就任から約3カ月が経過しましたが、会社を支えてくれている仲間への感謝と責任の重みを日々感じています。

—抱負は？

貴田社長 当社にはアルバイトを含め約300人の従業員が在籍しており、そのご家族まで含めると約1,000人の生活に関わる責任があります。そのため、重要な判断を一人で抱え込むのではなく、多くの意見を取り入れなが

ら進めていきたいと考えています。

まず取り組みたいのは、社内のブレンディングです。責任は私が負いますが、経営陣や社員とともに考え、議論しながら意思決定を行う組織を目指したいと思っています。

また、技術革新のスピードはますます加速しています。AIの進化はその象徴であり、業務の効率化や情報発信の在り方も大きく変わりつつあります。映画業界も例外ではありません。だからこそ変化を前向きに捉えながら、新しい時代にふさわしい映画館の姿を模索していきたいと考えています。

—コロナ禍の時は何が大変でしたか。

貴田社長 コロナ禍では、上映作品の公開延期が相次ぎ、作品そのものが不足する状況が続きました。さらに、入場制限や営業時間の短縮なども重なり、映画館にとって非常に厳しい時期でした。また、配信と劇場公開が同時に行われるなど、映画を取り巻く環境も大きく変化しました。そうした中で、「何とかお客様に映画館へ足を運んでいただきたい」という思いから、当社独自の企画に力を入れるようになりました。

日本のアニメ文化の原点を探る「どまんなか